

新しい家庭科教科書

- 児童・生徒の生活実感に迫り得たか -

福 田 はぎの

(文教大学教育学部)

The New Home Economics Textbook ; Can it catch at the actual feeling of children ?

FUKUDA HAGINO

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

新しい教科書からは安易な写真・イラスト過多状況が浮上する。特に多く挿入されているのが「家族の光景」だが、そこには時代錯誤的な「あるべき家族」の主張も読み取れる。一方、知識・技能を着実に習得させる本来の教育プロセスの簡略化とともに、児童の自主性に委ねる傾向がみられる。なかでも最も肝心な「子どもの“なぜ”」に向き合う姿勢に明確さを欠くのが問題である。

はじめに

家庭科の新しい教科書は、小学校では学年別の5、6年をまとめて1冊となり、中学校では技術分野と切り離され、家庭分野として単独の1冊となった。いずれも写真やイラストがふんだんに入り、ほとんどすべてがカラー・ページとなり、見た目には変わったという印象がある。では内容はどう変わったのであろうか。実は内容の変化と見た目の変化は無縁ではい。端的には、ページ作りが文章中心からコラム欄も含めてイラスト・写真・文章のいわば抱き合わせになされている部分が極めて多い。教科書が物事を知らせ考えさせる読本から見せて行動させる媒体へと変わりつつあるという印象もある。そこには編集方針という一般には見えにくい教科書作りの舞台裏の変化も進展しているように思われる。今回

の教科書は新学習指導要領改定を踏まえた初めての教科書という意味でも、この改訂に対応した刷新内容が問題となる。新しい教科書にはいつもより多様な問題が伏在していると思われるのだが、ここではむしろ、それらを全体的に検討することはできない。以下は、いくつかの疑問・問題点を中心に1つの見方を提示するに止まる。なお小・中学校の家庭科は2社が発行している。文中ではこれらをA社、B社と呼ぶことにしたい。

何のための写真・イラストなのか

家庭科が学習テーマとする家族や衣食住といった事柄は、児童・生徒の各人が、さまざま過去の生活実感としてすでに経験的に蓄積している。家庭科の実践性は、その蓄積に有効に関与しない限り、空理空論に陥

る可能性がある。しかし、この有効な関与ということには難しさがある。それが各人各様だということもさりながら、児童・生徒自身が自らの生活実態に無意識である場合がほとんどだからである。しかしまた、そうであるからこそ家庭科という学校教育でそれらを一定の客観性をもって引き出し、新たな知識・技能を加えて将来に向け整序することに意義がある。こうした課題に向き合う立場にいるのが教師であることはいうまでもないが、教科書もまた同様だと考えられる。だから家庭科教科書はこうした意義を踏襲する必要がある。今回、写真、イラストが増大したことには、それらが見る者の心に比較的瞬時に一定の反応をもたらすだけに、こうしたヴィジュアルな効果の内容的是非が問われる。またある意味で文章以上に掲載妥当性の判断が要求されるだろう。

そこでまず写真に注目すると、それらの多くがよくあるプライベートなスナップ写真である。それらに〈他人の光景〉である以上にどのような意味をもたせようとしているのか。イラストについては精巧なアニメを見て育った世代にどのような教育的インパクトがあるのか。確かに衣食住を構成する多様なモノ・空間については写真・イラストの効果は高い。しかし疑問もまた多く感じさせるのである。より具体的には周囲の文章等との整合性や掲載自体に疑問が生ずるものから、単に空白を埋めるためだけに用いられているのではないかと感じさせる等、概して安易な写真・イラスト過多状況も浮上してくる。なかには隣り合うページ間で、前の方では家族がお好み焼きを作る光景（写真）に布類が全くない（その場に必要とみられるフキンや手拭も。またヘラがテーブルに直に置かれていることも気になる）のに対して、次ページをみるとテーブル・クロスはもとよりエプロン、なべしき、なべつかみ、「かわいいランチョンマット」まで布類満載の食卓作りの光景（イラスト）

が描かれている（A社小学校教科書）といった一貫性の欠如に困惑するケースすらある。

頻出する「家族」

家族の写真・イラストも使用過多ではないだろうか。確かに新学習指導要領では家族という視点を強調している。「被服」、「食物」、「住居」等の従来の内容領域区分を廃したのも次のように家庭生活における衣食住と家族との関連性を改めて重視したためである。

「家庭生活は衣食住それぞれの生活が単独で行われているのではなく、また、家族とかわり合いながら営まれている。児童が生活を実感し、問題意識をもって課題を解決できるようにするため、内容の相互連関を図りながら柔軟に題材構成ができるよう内容を改善している」（小学校学習指導要領解説）

「…衣、食、住、家庭や家族などの内容について個別にとらえるのではなく、生徒が身近な課題として主体的にとらえて解決する方法を見いだすなど、よりよい生活の実践に向けて学習を進めていくことにより、家庭生活を総合的にとらえる力を付けることにつながるよう配慮する必要がある」（同中学校）

家庭科学習の方向付けを、家族という家庭生活の主体的側面に焦点を置き、ここに衣食住を統合させることで生活実態に即すというねらいが強化されたといえよう。一方、新しい教科書では衣食住関係の題材に家族との関連をもたせるような文章、写真、イラストを添付するといった工夫が読み取れる。布をぬう学習をそれだけに終わらせないで、家族や友だちへのプレゼントとして「生活に生かしていこう」（A社小学校教科書）という応用課題を明記し、あるいは同様の趣旨から「家族のふれあいを深めよう」と写真つきの家族の誕生日の記入例や「家族のための料理にチャ

レンジしよう」とゆでたまごの切り方の工夫例をあげたコラムを新設する（B社小学校教科書）というように。そうしたさまざまな工夫の結果なのであろうか。親子あるいは祖父母と孫の写真、イラストが増大した。

衣食住を家族生活の場面において説明するには、言葉より写真・イラストのほうがわかりやすいかも知れない。しかしそこに固定的な家族像を浮上させる危険性も存在する。実際、父と母と子どもが笑顔で収まっている写真・イラストが目立っている。一方、家族自体に触れた文では「家族のひとりであることを自覚して、家族と協力して生活しましょう」（B社小学校教科書）、「家族がたがいに支え合い協力し合って生活することをめざしましょう」（A社小学校教科書）というように「あるべき家族」が描き出されている。この傾向はこれまでのもあつたが、今回は、それが衣食住等にも広がった「家族」と連動することで、いっそう前面に押し出された結果となっているのではないか。

パターン化する家族学習

中学校についても家族というテーマはより明確化されているといってよいであろう。しかしここには小学校とは別に、生徒に委ねるいわば実習化と、重ねて実習形式のパターン化傾向という問題があるように思われる。「家族が集まりたくなる部屋の工夫をしよう」ということでワーク・ショップ形式が、「よりよい家族関係を考えよう」ということでロール・プレイング形式が採られている（B社）。生徒の話し合いや創意工夫といった自主性を重視することは、それ自体としてはよいことであろうが、実習が主観的なアイデア中心のミニ仮想世界作りに終始する可能性が高いのではないか。漫画のなかの親子の対話の続きを考えさせたり（A社）家族関係の良否の例を「1分間でかいてみよう」とか（同）、イラストの親子に付された噴出しや、イラスト付き

で設定された家族の対話場面の空欄に書き込みをさせる（B社）といった「実習例」も示されている。そうしたなか、やや誘導尋問的に「よりよい家族関係」へと到達させるようとする趣向が窺われるようなものがあるのはともかくとしても、学習をパターン化させたうえで、問題を詰まるところ生徒まかせにしていまいかねないことは、それでよいのだろうか。生徒の興味関心を「家族」に向けさせようとする教科書作りの工夫の跡がみられるとはいえ、他面で家族の実態を客観的に捉える内容が希薄であること、したがって教科書が現実の家族から目をそらす効果を持つことになれば、それは偏った家族学習となるであろう。

実習重視に行き過ぎはないか

実習場面が増える傾向は他にも指摘できる。家庭科教科書には元来、衣服、食物等の個々のモノを中心に、それらに即して年間を通じ、また学年を追って知識・技能を順次配列していくという教科書記述のスタイルがあつた。その背景には上述した領域区分があつたと考えられる。この廃止によっても、食物と被服では基本的に異なる教材であることに変わりはない。ただしそれらの扱いは別問題である。そこで気付かれるのが今回、児童・生徒の行動展開のなかに知識・技能を配置するという、扱い方の力点の移動がみられることである。すでにA社小学校等、テーマ学習を掲げ、児童の活動に即した教科書作りは行われてきたともいえよう。しかしそれが今回はさらに進んだといえなくもない。A社では例えば、いままでは食べ物と栄養素の一定の学習のあとに調理実習（野菜サラダ）が置かれていたが、今回はいわば前段なくして、いきなり「かんたんな調理をしてみよう」といって野菜サラダ作りが食物学習のスタート点になっている。栄養素が中学校に移行したことの影響もあるかもしれないが、いずれにしても、

まず行動ありきという1つの傾向が読み取れる。近年の子どもの実情からは、実習のほうがいっそうやりやすくなっているともいえる。しかし一方で、知識・技能を着実に習得させるという本来あってよい教育プロセスの簡略化とともに、ここにも児童の自主性に委ねる傾向がみられる。本文に記述された学習項目であった計量スプーンの使い方は、「ためしてみよう」という呼びかけのもとに児童が調べの対象として口絵の1つに収められたというように。「やってみよう」「調べてみよう」「くふうしよう」「まとめよう」といった呼びかけで行動を促す記述は、ほとんどの頁で見られる。また呼びかけ表現は本文にも多い。その反面で、説明文は簡略化されているか、または無い場合もある。ミシンもそれ自体の説明は消え、調べようという旨の記述のあとには使う手順が番号を付されてイラスト入りで列記されているにとどまる。何のために、なぜミシンを使うのか 教師が言わなければ児童たちは学習の意義がわからないままに終わってしまう危険性も否定できない。

子どもの“なぜ”に向き合っているか

カラー化したことで教科書に最も彩りを添えるようになったものの1つが次々と示される調理メニューの写真である。「どんなものをつくりたいですか」という見開き2ページ(A社)には、中心に置かれた野菜、くだもの、肉、魚の材料に発する19品の料理の盛り付け

が広がっている。「つくりたいものを考えよう」とあるから、<つくれる>ということが一応、前提にされているとみてよい。また確かに後続のページにレシピと時間配分された手順が示されている。しかしいかにも簡略化されている。これでは自宅で作るにも親にいちいち聞かないとできないであろう。またそこそこに「落としぶたをするのはなぜだろう」「みそを半分だけ入れるのはなぜだろう」「具を考えてみよう」等と問う質問者のイラストが描かれている。しかしその解答は必ずしも明示されていない。内容が中途半端ともいえる。ここにどのような改訂の考え方があったのか。疑問に思う人も多いに違いない。結果的に、見ための新しさだけが優先されている印象も強い。基本的メニューについて、わかりやすいのは、品目は少なくとも、やはりこれまで通りに材料の特性や調理手順を明記している場合(B社)であろう。

「家庭の教育機能の低下」が指摘され続けている現在、児童・生徒の家庭生活にさまざまな問題があるはずであるが、教科書にはそれを補完しようとする姿勢に一貫性を欠き、無責任に陥っている部分も目に付く。あれだけふんだんな児童・生徒、家族、地域の写真・イラストを用いながら、最も肝心な「子どもの“なぜ”」に向き合う姿勢が希薄であると思われる。編集に工夫をこらしても、どこか「子ども不在」がただよう教科書では、児童・生徒の生活実感にさえ迫り得るのであるだろうか。